

〈高校現場と英語辞書①〉

辞書は“絶え間なく進化する 学習ツール”である

小林義則



■自立した学習者を育てるには？

高校入学時に行うべきものとして、「辞書指導」がある。やみくもに「訳語」だけを探している生徒が多いという現状を無視できない。理解できない英文に出会うと、分からない単語の「訳語」を並べ替え、「訳文をでっち上げる」という作業に徹しているようだ。最近では、この作業を「電子辞書」で行う生徒が増えている。このような「日本語のパズル」が英語の学習になっている状況を見過してはならない。

「訳語」は、日本人が英単語の意味を推測する際のヒントであり、「用法」までは教えてくれない。「例文」をじっくり読むことなく、「訳語」だけを探しても、辞書を活用して英文を理解したことにはならない。「例文」を効率よく探し出してフルに活用するためには、「品詞」や「文型」の理解も必要となる。

「日本語のパズル」ではなく、英語の語順で英文を理解できるようになるまで学習者を援助する必要がある。指導者の役割は、「辞書を活用することで、平均的なレベルの英語なら自力で理解できる」というレベルまで、学習者を導くことだ。「品詞」や「文型」の概念を理解し、辞書の「例文」をフルに活用できるように指導することは、自立した学習者を育てるために必要なことである。

■「印刷辞書」or「電子辞書」？

勤務校では、一年次は「印刷辞書」が使えるようになることを目標とした。二年次になると、す

でにフルコンテンツ（完全収録タイプ）の電子辞書を持っている生徒もいたが、訳語が数個表示されるだけの「簡易電子辞書」を愛用している生徒が少なくなかった。「訳文のでっち上げ」に利用しているようだ。このような現状を踏まえ、二年次には、「電子辞書」の特色や選び方を説明し、希望者を対象に共同購入をした。

本年度、推薦したのは、セイコーインスツルメンツのSR-T4020である。『ベーシックジーニアス英和辞典』と『ジーニアス英和辞典』という二つの英和辞典を備えた辞書である。生徒の習熟度に応じて使い分けができるという利点がある。もちろん『和英中辞典』も搭載されている。他にも、『オックスフォード英英辞典』、『オックスフォードシソーラス』、『国語辞典』、『漢和辞典』、『古語辞典』、『百科事典』、『日本史小辞典』、『パソコン用語事典』と、十分過ぎる機能を備えていたが、学校販売向けの電子辞書であるため割安であった。

電子辞書の性能が向上したことで、「印刷辞書」にはできないことが「電子辞書」では簡単にできるようになっている。「印刷辞書か電子辞書か？」という二者択一の発想ではなく、両方を利用できることが求められる時代になったと考えべきだ。つまり、「どちらにするか」という「orの発想」から脱却し、「andの発想」へ転換することである。肝心なのは、指導者自身が「印刷辞書」ばかりでなく、「電子辞書」の使い方も習熟し、辞書が「強力な学習ツール」であることを学習者に伝えることだ。

■辞書にとって例文とは？

一般的に「例文の数」はできるだけ多い方がありがたい。もちろん、一冊の辞書に収録できる例文の数には限界がある。電子辞書なら「例文検索」という機能を用いて、該当する語句を含む例文を全て表示することもできる。この場合、必要な情報を取り出すというよりも簡易コーパスとして利用することになる。整理された情報が出力されるわけではないからだ。つまり、辞書の例文は、どのように「整理」されているかによって「例文そのものの価値」も決まってしまう。

会話によるコミュニケーションの場合はどうか。やはり「会話の定型表現」の情報が欲しいのではないだろうか。そこで問題になるのは使い方である。ここで言う「使い方」は、該当する語句の文の中での使い方ではなく、その定型表現がどのように用いられるのかという情報である。次の(1)(2)の例を参照していただきたい。

(1) *I'll think about it.* 考えておきます，どうしようかな《◆判断に困っているときの表現；時には断りの表現にもなる》

(2) *I'll have to think about it.* 考える必要がありますね《◆断りたい気持ちが強い》

これらは『ジーニアス英和辞典』の例文であるが、「会話の定型表現」をやや太い斜字体で示し、《◆》内には丁寧な解説が付されている。定型表現が背負う文脈情報を付加することで、例文の価値を高めている。このように「使い方」を明示した例文から学習者が得られる利益は大きい。

■フリーのウェブ辞書はどうか？

インターネット常時接続のコンピュータのそばで学習できるのなら、Google というサイトをコーパスとして使うと便利である。もっとも、Google はインターフェイスがシンプルだけに、十分に使いこなすにはある程度の予備知識が必要である。辞書の限られた情報では、どのような使い方をするのか分からない時や、どちらの使い方

のほうが一般的であるかを調べるときに便利である。ただし、生の英語をどこまで理解できるかという問題があるため、英語の指導者向けと考えた方がよいかもしれない。Google には「イメージ検索」という機能もある。この機能を用いると、関連する画像を検索してくれるので、「百聞は一見に如かず」の時がある。「Google ツールバー（フリーウェア）」をインストールすれば、さらに機能を拡張することができる。（<http://www.google.co.jp/>）

その他、見出し語として英和127万語、和英143万語を誇る「英辞郎 on the Web」がある。アルク社のシステムで検索できる無料のオンライン英和辞書である。（<http://www.alc.co.jp/>）

興味深いものとしては、英和コーパスをベースとした「生きた訳語・活用・用例の辞典」がある。信頼できる翻訳家による和訳と日本語著書の英訳から収集している。（<http://www.idd.tamabi.ac.jp/corpus/yourei/index.htm>）

■辞書の今後は？

コーパス・ベースの辞書が主流になってきているが、辞書が言葉の変化を迅速に捉えれば捉えるほど、「本来の規範的な使い方」が忘れ去られ、言葉の変化に拍車がかかるのではないだろうか。もはや、この流れを止めることができない時代に入ったと考えられる今、辞書は「言葉が実際にどのように使われているか」を忠実に映し出すものになるべきなのだろう。「規範を示す」という役割は「文法書」に譲るべきなのかもしれない。

ここ数年の辞書の進歩は目ざましいものである。特に、「語用論」や「認知言語学」の研究成果を前面に押し出した辞書も登場し、新しい試みとして注目に値する。今後どのような工夫を凝らした辞書が登場するか楽しみである。学習ツールである辞書の進化は、「学習スタイル」進化にもつながるはずである。

（こばやし よしのり・水戸桜ノ牧高等学校教諭）